

## The Human Factor について —行動の動機を求めて—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2002年9月30日 受理)

### 序

グラハム・グリーンは、*The Quiet American* (1955) のパイルやファウラー、*Our Man in Havana* (1958) でのホーソーン、ワーモールドそしてMI6の部長などの男たちが実在する社会の道徳観や倫理観、正義感や義務感等の既成観念や国家主義、民族主義、自由主義等のイズム、あるいは我欲などの動機にもとづいて行動を起こしては紛争の種をまいたり、自ら死を招いたり、他人を殺傷したりあるいは不幸にするような嘆かわしい結果を招く様を描いてきた。現在、世界では国際理解や人類の平和、戦争も差別も国境もない理想的な世界の建設といったことが世界の指導者たちによって表面的には声高に主張されながら、現実には世界各地での人種問題や宗教問題等を含めて、自由主義陣営と社会主義陣営とが角の突き合わせ覇権を争う口は心非な政治姿勢がとられている。その結果として自国の安全を確保し覇権を得るためには時として軍事力を行使したり、安全を脅かすとみなされる人々を闇から闇へ抹殺することも厭わない行動にでる国や人々がいる。それに引き替え、*The Quiet American*のフォング、*Our Man in Havana*のベアトリスやミリイーといった女性たちは男たちのように古い既成観念やイズム、我欲などにとらわれることなく、生きていることそのものの幸せと重要さを謳歌している。例えば、フォングは、自由主義陣営と社会主義陣営が不条理にもベトナムという他国で覇権を争い、戦争に明け暮れる悲惨な環境の中で、柳に風、あるいは流れる水の如く、今日という日を生きられことに喜びを感じて生きている。ベアトリスとミリイーもまたキューバという第三国で両陣営がしのぎを削る世界で天真爛漫に生きている。男達とは異なって不条理な世界を何の抵抗もなく受け入れている彼女たちの何物にもとらわれない誠実で自由な生き方こそが、平安な社会を築く唯一の実際的な方法であるとグリーンは訴えているように思える。そしてこの度の*The Human Factor* (1978) においてもこの考えは変わっていないようである。この作品においてもそうした世界で生きる人間の行動の動機について考察し、グリーンがこの人間世界をどのように捉えているかを言及してみたい。

### 遊技の世界と行動の動機

この小説が書かれた当時は、アメリカを筆頭とする自由主義陣営とソ連を筆頭とする社会主義陣営とが覇権を争っていたが、互いに相手を一気に倒せる圧倒的な軍事力を持つものではな

く、何とか相手に負けないように軍事力を充実させ、あわよくば相手を倒せる チャンスを伺うようながっぷりと四つに組んだせめぎ合い、凌ぎ合いの時代であった。いうならば互角の実力者同士の争いなのである。この戦いに勝ち残る秘訣は、相手を倒すことではなく倒されないようにすることなのである。その戦いは丁度チェスの好敵手を迎えて相手が隙を見せるまで万全の体制で持ちこたえることに似ている。そのような戦いの一翼を担っている英国諜報機関の長官であるハーグリーヴィス卿は自分たちの仕事を次のように説明している。

「われわれはゲームをやっておるのだ。判らんかね、デイントリー君。わしら全員の仕事がゲームなんだ。勝敗にこだわりすぎるとかならず負ける。柔軟性が肝心だ。そこで当然、互角の勝負をつづけておるのが要領となる」<sup>2)</sup>

狡猾な相手とスリル満点のゲームを継続することがゲームをする人間にとっては一番の醍醐味である。強力な相手を倒すことは難しい。だから負けないようにする。チェスのゲームであれば、そうした醍醐味を大いに楽しむのもいいが、東西両陣営の覇権を争うゲームでは生身の人間がそのゲームに巻き込まれ犠牲者になる可能性があるのである。すなわちアンクル・リーマス作戦はアパルトヘイト政策を採る南アフリカ共和国に自由主義陣営が衛星追尾システムを配置するという表向きの名目であるが、実際は大多数を占める黒人が革命或いは暴動を起こしたときに南アフリカ共和国政府がその暴動を抑えるために使用する小型の戦略核兵器を供給するものである。自由主義陣営は自陣営の利益のためには人種差別政策にも、また戦略核兵器が使用されたときに出る多数の黒人犠牲者のことにも目を瞑ることができるのである。そこには西洋世界の利益追求のエゴイズムと覇権への強い執着があからさまに浮き出ている。その端的な例がハーグリーヴィス卿のアンクル・リーマス作戦に対する考え方に現れている。すなわち卿はこの作戦の有効性に疑問を感じつつも、国家の方針として南アフリカ共和国やアメリカに協力し、且つ情報漏れをアメリカに知られ協力を得られなくなることを恐れ、情報漏れの源を調べるように命じたデイントリー大佐に次のように言う。『そしてその男を犯人に間違いなしと見たら、早いところ消し去るのがいい。裁判なしにだ。外部には知らさんでだ。できればその前に、そいつの連絡相手をつかまえるべきだが、ぐずぐずしておって、肝心な鳥に逃げられたらことだ。飛行機でモスクワへ飛ばれて、記者会見なんかやられたらまずい。逮捕もやはり問題外だ。』(41-42) ハーグリーヴィス卿は事の良し悪しを彼の自主的な判断ではなく国家から与えられた職責に基づいて国家の安全を最優先に考えて行動する。すなわち、国益という大義名分の前では一個人の生命や公的機関の不法行為など問題ではなく全てが許されるのであり、国家の安全は自分の双肩にかかっていると感じているようである。だからその過程において少々の人的な犠牲が出ようとそれは職業上赦されることと見なしている。そこには組織のため、国家のためには個人の犠牲はやむおえないとする組織優先主義の思想が見え隠れしているのである。その点についてR.H. ミラーは “*The Human Factor says that the state, as it expresses its morality in espionage, has no regard for human values.*”<sup>3)</sup> と述べているが、これは裏

を返せば、権力のあるところでは時と場合によって虚偽と不正が黙認されるということであり、正義などは状況によっていかようにも解釈される相対的なものであることを物語る。だからハーグリーヴィス卿には良心の呵責も罪の意識もない。そのことは反面、彼には国家やイデオロギイを越えて一人の人間としてこの不条理な世界で自分の信念に基づいて物事を考える能力を持たない俗物的な一面が伺える。

ハーグリーヴィス卿と同じ立場に立つ者が、カースルが南アフリカ共和国で勤務していた頃、カースルを取り調べたことのある南アフリカ共和国の秘密警察BOSSの一員であり、今は秘密警察の長官となっているコーネリアス・ミュラーである。彼という男は、「平凡な顔立ちである。もっぱら室内向けの顔。銀行員か若い公務員のように、なめらかで色白の顔。世俗的と宗教上を問わず、いかなる信仰の苦悩にも傷つけられぬ顔。命令一下、即座に、無条件に、活動に移る順応主義者の顔。」(115)そして「弁舌ばかりが達者な、大学教育を受けた外交官僚だった。このタイプの男は、おのれの行為の意味と価値を知っているだけに、鼻持ちならず、しかも危険な存在だった。」(118)、「偏見には理想と共通する何かがある。コーネリアス・ミュラーは偏見を持つことがなく、それだけにまた、理想がなかった。」(124)と説明されているが、彼もまた自ら考え、事の本質を見て判断する人間ではなく、置かれた環境の中で体制側に組みし、体制を維持するために抵抗する人々を情け容赦なく逮捕し投獄するだけの人間である。そのことはカースルの良き理解者であった共産主義者カーソンを獄死させたことでも明らかである。また彼は南アフリカ共和国の秘密警察に追われていたサラとカースルが、現在、英国で結婚しているのを知らずに、パーカムステッドにあるカースルの家を訪ねた折りにサラのことについて次のように述べている。

「あらゆる点で、彼女は賢い娘でした。われわれは彼女の過去を詳細に調べあげてあったのです。学歴はトランスヴァールのアフリカ大学の卒業生。あの大学はアメリカ人の教授連中が学生達に危険思想を吹きこむので有名でしたが、しかし、ぼく個人は、アフリカ人が賢明になればなるほど、それだけ容易に一人ならぬ方法で一転向させられるのを知っていたのです。たとえばあの際、一ヶ月も彼女を刑務所に収容していたら、まちがいはなくわれわれの陣営にひき入れていたと信じています。こんどのアンクル・リマス作戦でも、彼女がいてくれたら、われわれ双方の国家のために、どんなにか役立ってくれることでしょう。それで過去の不快な思い出を忘れられるのですがね。」(121-122)

それでいてかつて逮捕しようとしたが、カースルの手を借りて南アフリカ共和国を脱出したサラと7年ぶりに顔を合わせてもアパルトヘイトなど知らないかのように平然として丁重に振る舞う様には、置かれた状況にどのようにも順応できる柔軟性と底知れぬ恐ろしさを秘めた人物であり、慥慥無礼という印象を与えると同時に、自分には権力の後ろ盾があると確信して勝ち誇ったように構えている。事実、彼は人種主義、国家主義が時代の精神であると固く信じている典型的な人物なのである。何故なら彼がこの7年間の仕事ぶりでBOSSの長官にまで上り詰めたことは彼が体制維持のためにどれほど貢献し、その陰でどれほど多くの人が苦しんだかを物語っているのである。白人であるコーネリアス・ミュラーは、数百年前に自分たちの先祖が南

アフリカ共和国に移住してこの国で生活してきたのだから、自分たちはアフリカ人であると主張するが、同じアフリカ人である大多数の黒人に対するアパルトヘイトや少数の白人支配に全く矛盾を感じないのは高い教育を受けた人間としては余りにも理不尽であるといえるだろう。彼は、軽信と人間的な弱さによって、自分が関わっていることの全体を多面的に理解するのではなく、自分が関わる部分だけを何の批判的な目も向けず、命令されたことに忠実に機械的に任務を果たし、他人の痛みを理解しない知性はあるが心のねじれた人間といわざるを得ない。同時に、彼は、権力の存在するところでは、善悪を考えたり、検討したりすることは許されなくて、出世するためにはただ服従することが必要なのだと考える人間の典型といえるだろう。

社会において物を生産したり、サービス業に従事したり、市民生活に役立つ仕事、或いは教育や研究などの文化的な仕事をすることは生産的であり、社会的な活動である。そうした活動からは新しい人や物や価値観などが生み出されていく。それに引き替え、諜報活動というのは表の世界には出ない闇の世界で手探りで敵対する相手の内情を探り、あわよくばその足下をすくい、相手の意図するところを妨害し破綻させようとする隠密活動なのである。そのような世界はまともな人々が暮らす生産的且つ社会的な世界とは違って自ずから非生産的且つ非社会的な世界とならざるを得ない。この事実はそのような世界に関係するハーグリーヴィス卿やコーネリス・ミュラーによって示されてきたが、その典型はハーグリーヴィス卿の下で働くパーシバル博士と言えるだろう。ハーグリーヴィス卿が諜報機関の表の顔なら、パーシバル博士はまさに裏の顔といえるだろう。彼は芸術に対する優れた鑑識眼を持ち、医師という高い学歴と専門的な知識を身につけながら、患者を診るのではなく、諜報機関に関係する外部には頼めない怪しげな死亡診断書に署名したり、諜報機関にとって都合の悪い人物を隠密裏に毒殺することを平然と実行する破壊的な冷血漢である。彼は諜報機関で働く二重スパイや裏切り者を策略に掛け釣り上げることを、まるで趣味である魚釣りで魚との駆け引きを楽しむように楽しんでいる。その意味で彼は魚釣りの時も仕事においても獲物との格闘を楽しむプレイヤーといえるだろう。彼は目的遂行の過程において小さな誤謬や犠牲が生ずることはやむおえないことであり、そのことを気にするようでは大儀は達成されないと考えている。「われわれはみな、いつもどこかで犯罪をおかしているようなもの—それがわれわれの仕事でね」(40)と彼は常に自嘲的に述べている。彼はデイヴィスの死にたいして疑問を抱きだしたハーグリーヴィス卿に向かって言う。

「デイヴィスのことは、あまり気になさらんほうがいいでしょう。彼を失ったところで、われわれの役所はいっこう困りません。あの男は、入所当時の訓練が不足で、その結果がここへきてあらわれていました。無能で、不注意で、酒に溺れる。おそかれ早かれ、問題になる男でした。」(242-3)

良くいえば冷静、悪くいえば冷酷な人間であるが、人間一人の死を些細なことと考えるかどうかは個人の人間性の問題である。ある意味では彼のような性格の人間が諜報機関で働くのに適した人間かもしれない。彼は、食事をしワインを飲みながら、彼が毒殺した無実のデイヴィス

の死について平然と語ることのできる男なのである。また、サラにモスクワへ行くことのできない事実を淡々とのべるパーシヴァル博士の人間性を ‘a mind unruffled by the enormity of its own action’<sup>4)</sup> とグラハム・スミスは述べている。しかしながら、彼も学生の頃は資本主義社会の矛盾や欠点を認識して、コミュニストを自認し、国際主義こそ正しいものと信じていたが、今はかつては否定していたナショナリズムの防衛のために諜報機関で働いているのである。彼が趣旨替えをした理由を次のように述べている。

「それは、あなたがいま言われたように、大人になったからです。コミュニズムがよい世界を作るとは思えなくなったのです。あれはけっきょくのところ、キリスト教ほども役には立ちません。わたしは十字軍の戦士のタイプじゃありませんがね。資本主義か？ 社会主義か？ 神はおそらく資本主義でしょうな。わたしはこの一生を、勝利者の側に立って過ごしたいのです。」(198)

この打算に秀でた性格、それでいて何ら良心の呵責を覚えない鉄面皮な特性、仮面を被ったニヒリズムこそが人生の勝利者になる基本的な条件なのかもしれない。豪華な食事、すばらしい美味しいワイン、楽しい魚釣り、高額の収入といった彼の個人的な欲望を満たしてくれるこの諜報機関での職業のためには何をすることも厭わないのである。個人的な欲望の前では過去の理想など跡形もなく、怪しげな行為にも良心は疼かない。しかも彼の行為は、彼の個人的な行為ではなく、ハーグリーヴィス卿を頂点とした諜報機関という組織によってなされる行為であり、その責任は彼個人にはないのである。つまり彼の身の安全は組織によって常に守られているということである。彼はハーグリーヴィス卿に向かって、「『ジョン、ジョン！あなたもわたしにも信念とか主義とかをうんぬんする資格はないのです。われわれは十字軍ではありません。一現代は誤った世紀です』」(197) と言う。パーシヴァル博士には人間にとって最も大切な基本的な人間的要因、すなわち人を愛する心、人間的な誠実さが欠けているため、逆に冷静な判断、計算ができて、冷酷な行動を実行することができる。そしてたまたまその判断が誤っていたとしても、良心の呵責を覚えることはない。従って「勝ち組に組みする」彼の哲学からすれば、彼の属する機関なり、国家なりが負け組になると予測できると寝返る可能性も十分にあるかもしれない。かつてデイヴィスはパーシヴァル博士のクリスチャンネームがエマニュエルであることを知って、「『エマニュエルとは良き便りをもたらす者の意味だ。』(57) と言ったが、彼はまさに不幸をもたらす使者である。

ハーグリーヴィス卿、コーネリアス・ミュラーそしてパーシヴァル博士の三人は古い時代のナショナリズムやセクト主義を打破し、現代社会にとって必要な相互理解と世界平和を実現する努力をしなくてはならない指導的階級に属し、国家や大衆をリードする立場にありながら、実際は旧態依然とした体制の維持に専念し、体制を守る立場から道徳観や倫理観そして正義感も省みることなく、彼等の行為を現在の体制にとって必要不可欠なものと考え、その是認のなかに現代社会の底なしのエゴイズムと偽善性、悪魔性、残忍性を隠し込み、次の社会への前進を妨げているのである。彼等には人間の悲しみと苦しみを軽減しようとする誠実さも情熱も感

じられない。また人間に対する優しさ、憐憫などはみじんも感じ取れない。彼等のしていることはあらゆる点から見て非生産的且つ非社会的であるが、そのことを象徴するようにハーグリーヴィス卿には子供がおらず、パーシヴァル博士は独身主義者であり、カースルもデイントリー大佐も家庭的に恵まれているとはいえ、彼等は全て長い年月にわたって継承してきた人類の遺産を次の世代に伝える人間としての責任を果たしているようには思えない。特に人生を誠実に生きようとせず、ゲーム感覚で生きるハーグリーヴィス卿、パーシヴァル博士、そしてコーネリアス・ミュラーは階級社会の遺物で社会に巣くう寄生人間であり、諜報機関社会を汚染していく悪の根元といえる。

パーシヴァル博士というプレイヤーに対抗する好敵手がカースルと言えらるだろう。愛国者でもなく、思想的に偏ることもなく、高級官僚でもなく、宗教を信ずることもない人間。時間厳守で、人前では酒も控え、仕事が正確で事務能力もあり、何をすることも慎重で実に目立たない人間である。にもかかわらず、彼は諜報活動の世界でのプレイヤーとしては一流と言えらるだろう。何故なら彼自身が疑われることのないように細心の注意をはらって目立たないように生活しているし、南アフリカ共和国に派遣されたときもアパルトヘイトに関する本を書く資料の収集と言いながら、実はサラを媒介として諜報活動に従事し、コーネリアス・ミュラーとヴァン・ドンク大佐を相手に南アフリカ共和国のBOSSの部屋に呼ばれたときにも、見事なプレイを演じて彼等の狙いがサラであることを突き止めたプレイヤーでもあった。また、デイントリー大佐がカースルの容疑を確かめるために自宅を訪ねたときも、カースルはデイントリー大佐に囮のデイヴィスに目を付けたパーシヴァル博士やハーグリーヴィス卿の過ちを説明し、その結果、彼が情報漏洩の張本人であることを悟られそうな「この危険なゲームを愉しんでいる」(253) 様子である。デイントリー大佐は人間的には「彼はつね日頃、信頼できる男と呼ばれるのにふさわしく行動してきた。人生の波乱を避けたいというのが彼の口癖だった。」(102) ということからもカースルと同質の人間であることが理解される。監察官としての彼はデイヴィスの死因に対しても証拠を重視し正確を期した。職場もカースルと同じく諜報機関であるが、彼等の違いは既成社会の既成観念を是とするか否かである。

カースルはデイヴィスの死後、アフリカ関係の情報漏れはアフリカ関係の部署に残った彼からであることが明確になるので、二重スパイとしての任務を辞退するが、彼にcheckmateをかけるのがコーネリアス・ミュラーである。ミュラーが持ち込んだアンクル・リーマス作戦は南アフリカ共和国に住むサラの同胞である多くの黒人にとって非常に危険な情報である。カースルが身を危険に晒してまで情報を東側に漏らすか否かは彼自身の人間性にかかっていることである。しかし彼がハーグリーヴィス卿やパーシヴァル博士とのゲームに勝つためには彼の正体を暴かれないうちに二重スパイを辞めることである。だが彼にはカーソンが「“カースル君、君は小事にこだわりすぎて、大局を見失っている。”」(128) と述べたり、伝道師が「“あなたはつまらない問題にひっかかって、一番大事なことを考えようとしない。”」(129) と言うように感情に流されることがある。そこがカースルとパーシヴァル博士のhuman factorが大きく異なっ

ている点である。彼がパーシヴァル博士とは異なって愛国心に燃え、道徳観や倫理観を大切に、規律を守る正義感の強い人間というわけではない。それどころかデイヴィスに向かって、『わたしのところへ来るのは間違いだよ、デイヴィス、わたしという男は“正義”という言葉の意味する観念のかけらも抱いたことがない』(156) と言うようにカースルは既成社会の正義感などにはとらわれない。従って彼は倫理観や道徳観という既成観念にもとらわれることはない。ただ彼はカースルの母親が心配していたように『『ちょっと親切にされただけで、精一杯の感謝の気持ちを示したがった。』』(134) と言うように動物の基本的本能である感情には非常に強く影響される種類の人間である。だから妻、サラへの愛情が強ければ強いほど、サラへの強い愛が形を変えてサラの連れ子であるサムへの愛に、ひいてはサラの同胞たちへの同情も形を変えて強くなっていると考えられる。つまりカースルには愛する者に対する誠実さがある。その結果としてカースルがのびきならない状態に追い込まれていったことを思い返せば、確かにこの作品のエピグラムの ‘I only know that he who forms a tie is lost. The germ of corruption has entered into his soul.’ と言うことが言える。そしてミラーの言うThe “human factor” of the novel’s title, on one level, is the dooming connection of the love tie.<sup>5)</sup> も本当かもしれない。彼が身の危険を冒してまでも情報を漏らしたことに対してガストンは “Those characters who can sacrifice themselves for their fellow man may lose a great deal in the process, but they save their humanity.”<sup>6)</sup> と述べているが、これはカースルの人間性に基づくものであり、彼の内部から彼を揺り動かす原動力、すなわち、パーシヴァル博士の冷酷さと同じhuman factorの一種であろう。だからカースルが巻き込まれるのは必然的なことなのである。しかしながら、冷酷なゲームを継続していく過程においては個人的な感情というものは冷静な判断を狂わせる危険性がある。カースルの動機についてはサラの同胞を救いたいという博愛的な原因のみならず、ミュラーが指摘するような個人的動機もあったと思われる。

「一部員の一人にチェスの名手がありました。彼にとっては、情報仕事もチェスの一種で、相手がやはりチェスの名手ともいえるしたたか者の場合のみ興味を感じました。そのような相手はあんがいないもので、けっきょくはみずから進んで、もっとも至難なゲームである二重スパイの役を演じることになりました。おそらくこの男、複雑なゲームをつづけることじたいに満足していたのだと思います」(235)

カースルの行為の動機には、一見、サラの同胞である虐げられた多くの黒人たちに対する非常に博愛的な感情がその根底にあるように映っているが、そのなかにパーシバル博士という好敵手を困惑させたいという個人的な対抗心が隠れているように思われる。むしろカースルには危険なことに挑戦したい冒険心、あるいは同僚のデイヴィスが競馬に夢中になっていたのと同じ射幸心に駆られるような動機があったと見るべきだろう。何故ならカースルには同僚のデイヴィスがパーシヴァル博士の手にかかって亡くなったとき、強い怒りは覚えても、その死に対して平然としていることについてA.A.デヴィティスは次のように述べている。“Castle feels little responsibility in having brought about the death of his friend”<sup>7)</sup> そしてその理由として、パーシヴァ

ル博士という好敵手を迎えて“Castle feels little remorse for Davis's death, for Davis is an expendable pawn”<sup>8)</sup>と説明している。

このように見てくると、この作品に登場する男達は人間にとって最も大切な親子や夫婦の絆をはじめとして人間相互の愛、信頼、誠意そして人間の尊厳といったものの重要性を十分に認識できておらず、既存の社会を維持するために考え出された国家への忠誠、愛国心、国益、あるいは仕事への義務感や使命感に縛られたり、安楽な生活や私的な好みや競争心に押し流され、そうしたものに自分の行為の正当性あるいは妥当性を見いだしている人間といえるだろう。

サラは南半球の最南端にある南アフリカ共和国の出身である。今はカースルと結婚して北半球の北の方に位置するイギリスで幸せな生活を送っているが、BOSSの大物、コーネリアス・ミュラーがアンクル・リーマス作戦のためにイギリスの諜報機関を訪ねてやってくる。このことは単なる南アフリカ共和国と西側自由主義諸国との利害関係の連携を意味するだけではなく、人種差別という社会悪の根深さが地球の裏側まで黒人を追いかけてくることを意味しているのである。つまり彼女にとって諜報機関は幸せをもたらすのではなく、常に不幸をもたらす不吉な使者なのである。サラは諜報機関の秘密主義が非常に危険なことであることを本能的に感じ取っている。だからサラはカースルに向かって退職することを勧めて次のように言う。

「できることなら、あなたに退職してもらって、あんな人たちと離れたところで暮らしたいわ。」

「そのつもりでいる。一数年のうちに」

「いますぐがいいのよ。いますぐ、サムをベッドから連れ出して、外国へ行くの。つかまえられる最初の飛行機で、行けるところまで行って—」

「年金が下りるまで待ってくれ」

「年金なんか要らないわ。あたしだって働けるのよ……」(175)

サラにとって大切なものは社会でも国家でもない。彼女にとって大切なもの、信じることのできるもの、命を賭けて守らなくてはならないものは息子のサムと夫のカースルだけである。彼女にとってサムとは親子として血で繋がっているのであり、カースルとは夫婦として愛で繋がっているのである。この親子・夫婦関係だけが何にもまして大切なものであり、それを守るためには他のことは全て犠牲にし、無視することができるのである。そこには現代的な人間というよりも原始的な世界の人間、あるいは動物的本能に近い特質を感じさせるものがある。カースルの役所から科せられている秘密主義についても、「『どうしてそれを、このあたしにははなせないの？上のひとから禁じられているからなのね。防諜法とかいう、ばからしい法律があるために』」(225)と、問題にしないのである。「『世間から何をいわれたって、あたしは平気よ』」、「『あたしたちにはあたしたちの国があるわ。あなたとあたしとサムが、あなたはこれまで、いちどだって、あたしたちの国を裏切ったことがないのよ、モーリス』」。(228) 彼女には人間の誠実さと愛を信じ、古臭い観念を放棄して、新しい現実がどれほど空恐ろしく、どれほど嫌悪すべきものであってもその現実を迎え入れる強さがある。彼女は、国家や社会、道徳観や倫



理観、正義感や義務感は社会を支配する人間が自分たちの統治に都合のいいように考えて創造したものであって、それは相対的なもので、絶対的なものではあり得ないと考えている。従って彼女の行動の動機は彼女にとって絶対的な親子・夫婦の絆、つまり人間的な愛以外にはあり得ない。

## 結論

我々がこの世に生を受け、生きていく過程では、さまざまな人間関係や所属する国家や、社会、仕事上の関係において無数の繋がりを持たざるをえない。そうした繋がりには国民として、市民として時には組織の一員として責任や義務が必然的に伴ってくることは否定できない。それらの関係が個人の中で何ら矛盾を生じないときは問題ないが、それらの複雑な人間関係にあって、ある方面との関係において、自分自身に対して誠実であり、希望する行為であっても、他の側との関係において不利益を与える行為になりかねないとき、その行為は他の側に立てば不誠実であり、且つ背信行為と受け取られる一面を持っている。われわれの世界はそのような不条理に満ちあふれた世界であり、のっぴきならない不条理な状況に置かれたとき、自分自身の考えに従って行動せざるを得ない。そうした自覚に目覚めた人間がカースルであった。彼は行為の良し悪しを越えて、ことの善悪にもとづいて人種や国籍、イデオロギーそしてイズムを越え、自らが信じる善なるもののために行動した結果が、売国奴と呼ばれ、妻子との再会を絶たれ、言葉も解らない異国で孤独のうちに余生を送らなくてはならなくなったが、カースルの心情を思いやるとき、現代世界を人種や国籍、イズムやイデオロギーで分裂させている一部の支配階級の狭量な思想やエゴイズムを払拭しない限り真の意味での自由な世界は存在し得ないのである。人間は長い歴史の中で同じ悲劇を限りなく繰り返してきたし、今も繰り返されてはいるが、それでも少しづつではあるが、多くの国家が協力した経済的な共同体や地域的な連合体、そして通貨の統一などが形成されつつある。また、教育の普及と人の往来もより自由になり、他民族への理解も徐々にではあるが深まり、精神の自由と行動の自由を獲得し、古いしがらみから解放された人達も増加していることも事実である。人間が戦争や差別などがない本当に自由で平等な世界を手に入れるまでには気の遠くなるような年月と血の出るような努力と多くの犠牲者を必要とするだろうが、カースルはそうした世界を実現する過程での犠牲者の一人とグリーンは捉えているのだろう。

## Notes

- 1) Graham Greene, *The Human Factor* (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1982)
- 2) 宇野利泰訳、グラハム・グリーン全集25『ヒューマン・ファクター』、早川書房、東京、昭和58年、p.41、以後本文中に引用した邦文はこの本の頁数のみを表示
- 3) R.E.Miller, *Understanding Graham Greene* (Columbia: University of South Carolina, 1990), p.143
- 4) Graham Smith, *The Achievement of Graham Greene* (New Jersey: Barnes & Noble Books, 1986) p.190
- 5) R.E.Miller, p.141-142
- 6) Georg M., A.Gaston, *The Pursuit of Salvation: A Critical Guide to the Novels of Graham Greene*. (New York: the

Whitston Publishing Company,1984) p.128

7) A.A.DeVitis, *Graham Greene* (Boston, Massachusetts: Twayne Publishers, 1986) , p.138

8) A.A.DeVitis, p.138

*On The Human Factor*  
— The Motivation Research for Their Deeds —

Toshihiko Ueki

*College of Liberal Arts and Science for International Studies*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 2002)

Recently the leaders and the governments of the camps of the East and West put great emphasis on the peace of mankind and the importance of mutual understanding between countries. But in the real world the liberalism camp and the socialism camp are confronted with each other and competing for dominance over the world, and also there are many other problems like the race problem, the religious conflict and so on which cause many discords in the world.

As the result of these conflicts and problems, to keep the security of his country and hold supremacy over other countries, the persons who work for a secret service sometimes use military strength, and according to circumstances, they do not hesitate to assassinate a person who is a nuisance to the policy of his country.

In this paper we want to inquire into the motives of their actions who engage in espionage activities and touch on Greene's view of the world from his work.